



Title	初期ゲーテとヴィーラント
Author(s)	波田, 節夫
Citation	大阪大学, 1984, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34889
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【1】

氏名・（本籍）	は	た	せつ	お
	波	田	節	夫
学位の種類	文	学	博	士
学位記番号	第	6	6	3
		2		号
学位授与の日付	昭和 59 年 10 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学位論文題目	初期ゲーテとヴィーラント			
論文審査委員	(主査)			
	教	授	片山	良展
	(副査)			
	教	授	赤木	昭三
	助	教	授	中村
			元保	

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ライプツィヒ留学時代からシュトラースブルク留学のために再び郷里フランクフルトを旅立つまで（1765 年秋－1770 年春）、すなわち16歳ないし20歳の若いゲーテ(Johann Wolfgang Goethe)がヴィーラント(Christoph Martin Wieland)から受けた影響を明らかにすることを主目的とするものである。本文は本論と付論を合せて400字詰610枚、これに主対象となるヴィーラントの五つの作品の粗筋、図版、後注、文献一覧を含む付録を加えると、全体で991枚に及ぶ大作である。

序論と五つの章および結論からなる本論の内容は以下のとおりである。

1770 年 2 月 20 日付の私信の中で、当時20歳のゲーテは、シェイクスピア(William Shakespeare)、画家エーザー(Adam Friedrich Oeser)とならべてヴィーラントの名を挙げ、この三人こそ自分にとっての「本当の先生」である、自分の謬りを教えてくれた人々は他にもあるが、その正し方を教えてくれたのはかれらだけである、と書いている。本論文の論者は序論の冒頭にこの箇所をかかげ、このようなゲーテ自身の証言があるにもかかわらず、従来の研究では初期ゲーテとヴィーラントの関係が正しく解明されていないことを指摘し、その理由として、(1)ゲーテの創造的才能があまりにも偉大であるために、彼の文学上の指南役のような人物の存在を認めようとしにくい傾向が長らく支配的であったこと、(2)同時代の批評家が特別な状況下で行なったかたよったヴィーラント評価を、ドイツ文学史がそのまま継承してきたこと、(3)歴史・批判版全集がいまだに完結しないことによっても明らかな、ヴィーラント研究の基礎資料の不足、の三つを挙げる。

第一章「1760 年代迄のヴィーラント」は、ヴィーラントの前半生の伝記、思想的遍歴、文学活動を説明し、第五章で取り上げられる作品群以前に書かれた一連の作品の内容と傾向を概説する。

第二章「ライプツィヒへ出発する迄のゲーテ」は、幼年時代、少年時代のゲーテがどのような家庭環境の中で育ち、どのような教育を受けたか、彼の教養、創作体験の内容はどのようなものであったかを詳細に述べる。

第三章「初期ゲーテの生活」では、当時のゲーテの書簡などの資料によって、ライプツィヒ留学中のゲーテの生活実態が説明される。

第四章「エーザーと美の理想」は、ライプツィヒ時代のゲーテの絵の師匠であり、ヴィーラントの著作の挿絵作者でもあったエーザーとゲーテとの関係を詳しく叙述し、「高貴な単純さと静かな偉大さ」というヴィンケルマン (Johann Joachim Winckelmann) の美の理想が、その親友であったエーザーを介してゲーテに影響を及ぼした事情を説明する。

本論文の主章である第五章は四つの節に分かれ、ヴィーラントの文学が初期ゲーテに及ぼした影響を、それぞれ異なった側面から論述する。論者はこの時期にゲーテが実際に読んだヴィーラントの作品を各節の主題に対応させているが、それらの作品名と初版発行年はつぎのとおりである (一部略記)。

- (1) 『夢想に対する自然の勝利』 (Der Sieg der Natur über die Schwärmerey, oder Die Abentheuer des Don Sylvio von Rosalva) — 1764 年
- (2) 『アガトンの実話』 (Geschichte des Agathon) — 1766 / 67 年
- (3) 『滑稽物語集』 (Comische Erzählungen) — 1765 年
- (4) 『イドリス』 (Idris) — 1768 年
- (5) 『ムザリオン』 (Musalion, oder Die Philosophie der Grazien) — 1768 年

第一節「『共感的愛』の自覚」で論者は、若いゲーテが主として諷刺小説『夢想に対する自然の勝利』から、最初の一瞥とともに男女を結びつける人間的な「共感的愛」 (die sympathische Liebe) を積極的に肯定することを学んだこと、そしてこの新恋愛観を 1768 年秋に執筆した戯曲『同罪者』 (Die Mitschuldigen) 第一稿の中で採用していることを指摘する。なお H. Fischer-Lamberg は同戯曲中の「共感する心」 (ein sympathisch Herz), 「共感」 (Sympathie) などの表現に『イドリス』からの影響を見ているが、論者は語句の比較対照を通して『夢想に対する自然の勝利』からの影響の方がより直接的であると推論する。

第二節「情熱に関する知識」では、論者は『アガトンの実話』を取りあげ、これが用語法の面で『同罪者』第一稿にかなりの影響を与えていることを論証するとともに、当時のゲーテの書簡や後年の発言を検討しながら、ヴィーラントのこの小説は、ケートヒェン (Katharina Schönpkopf) との恋愛関係に悩んだ若いゲーテに、人間のもろもろの情熱、とくに恋する者の感情の動きに関するさまざまな知識を教示し、いわば恋愛教科書のような役割を果たしたと指摘する。

第三節「描写法」では、諸家の研究を参照しながら、韻文で書かれた『滑稽物語集』からの用語法及び描写法の面での模倣が、ゲーテがケートヒェンに捧げた詩「ツィブリス」 (Ziblis), 「リュエデ」 (Lyde), 「眠りの精に」 (An den Schlaf) や 1768 年春に書きあげた牧人劇『恋人のむら気』 (Die Laune des Verliebten) に、また『イドリス』からの模倣が初期の詩「思い出の品」 (Die Reliquie), 「愛の幸福」 (Das Glück der Liebe), 「月に寄せて」 (An den Mond) や『同罪者』第一稿に認められ

ることが論証される。

第四節「中庸の徳」では、恋を失い大病を得、失意のうちにライブツィヒを去ったゲーテが、「優美の女神の哲学」という副題のついた長編韻文『ムザーリオン』を読んで、人間は自分に対して他人に対しても妄想を抱かず、なにごとにおいても過度を避け、中庸の徳を見つける努力をすべきことを学んだこと、またさきにエーザーから教えられた美の理想を再確認したことが、当時のゲーテの書簡など多くの資料にもとづいて論述される。

結論は以上をまとめたものである。そして論者は、この時期につづく「疾風怒濤」時代になると、ゲーテのヴィーラントに対するかつての尊敬は軽蔑に変わるが、彼の世界観がヴァイマル移住ののち修正され、再びヴィーラントの世界観、古典主義的伝統の世界に近づいた事実を併せ考えるならば、その必然的前段階としてヴィーラントが初期ゲーテに及ぼした影響はますます正当に評価される必要がある、と結んでいる。

以上の本論で考察の対象となった時期以後ゲーテは、まず「疾風怒濤」派の代表作家として、その後は同じヴァイマルに住む宮廷人・文人仲間として、約40年間ヴィーラントとつながりを持ちつづけた。論者は付論Ⅰにおいて「疾風怒濤」時代のゲーテとヴィーラントの関係を、付論Ⅱにおいてその後の両者の関係及びゲーテが自己の全生涯にとってのヴィーラントの意味をどのように評価していたかを概括している。

論文の審査結果の要旨

従来の研究では、ヴァイマルへ移り住むまでのゲーテがだれの影響を強く受けていたかという問題については、ゲーテの「疾風怒濤」時代を導入したヘルダー（Johann Gottfried Herder）の影響が大きく取りあげられるのが常で、ヴィーラントは重要視されていなかった。したがって彼とゲーテとの関係をテーマとする研究の多くは、彼が先に移り住んでいたヴァイマルへゲーテがやってきて、両者の個人的交際がはじまる時点以後を扱い、それ以前のことについては、ヴィーラントの若干の小品がゲーテに文体上、作詩技術上の刺激を与えたことを指摘する程度にとどまっている。

またヴィーラント研究そのものも、第二次世界大戦後になってようやく本格化してきたとはいえ、ゲーテ、シラー（Friedrich Schiller）などの研究にくらべるといちじるしく手薄であり、とくにわが国では、飯塚信雄氏の一連の論文をのぞいてはまとまった研究が少く、巖谷小波による初紹介（明治23年）から一世紀近くたった今日になっても、いまだヴィーラントの邦訳は刊行されていない。

このような状況の下で、若いゲーテがヴィーラントを師として仰いでいたという点に着目し、両者の個人的交際や文通がはじまる以前の、したがって立証資料の乏しい対象領域に立ち向かい、たんに文体の面だけではなく内容の面でも、先達ヴィーラントがその作品を通じて未熟な文学青年であったゲーテになにを教えたかを考察したのが本論文であって、その先駆的業績としての意義は大きい。

とくに、ヴィーラントの長編小説『夢想に対する自然の勝利』と『アガトンの実話』の随所に挿入さ

れている感情、情熱、恋する者の心理などについての作者の見解が若いゲーテを大いに啓発したという指摘は、今後のゲーテ研究及びヴィーラント研究に新しい視点を提供したといえる。

本論文の方法上の特色は、文献資料を広くそして徹底的に精査し、つかみ得た事象をつぎつぎに提示し、事象をして語らしめようとする点にある。この研究姿勢が本論文の長所である実証性の源泉である。

しかしその反面、同じことが弱点の因にもなっている。たとえば第五章に先だつ四つの章の中で展開される1760年代末までのヴィーラントとゲーテそれぞれについての伝記的事実や精神生活の背景の記述は詳細を極め、それ自体としてはまことに興味深いが、かならずしもそのすべてが主章である第五章に直接関連するとはいえず、枝葉末節にかかわりすぎている印象を与える箇所もなしとしない。いわば前おきとも見えるこの部分の贅肉をおとし、主章との関連を主体にして圧縮すれば、全体として一層ひきしまった好論文になったであろう。

さらに、主章で述べられるゲーテに対するヴィーラントの影響は、全体としては正しく把握されていると思われ、示唆に富むが、個々の点については、ゲーテの受けた影響をヴィーラントによるものと特定できるだけの証拠が不足している箇所がある。

とはいえ、これまで内外の研究者がほとんど顧みることのなかった領域とあえて取りくみ、18世紀ドイツ文学の研究にあらたな一石を投じた本論文の功績は、これらの弱点を補うに足るものである。

以上により、本論文を文学博士の学位請求論文として十分な価値を有するものと判定する。